

資料

高等学校におけるダンス授業のカリキュラムに関する研究 実態調査にもとづいて

中村 恭子*・武井 正子**・浦井 孝夫***

A Study for the Curriculum of Dance Lesson in the High School Through the investigation into the actual condition

Kyoko NAKAMURA*, Masako TAKEI** and Takao URAI***

Abstract

The purpose of this study was making clear the task of current dance lesson through the investigation of real situation and drawing the key to desirable dance curriculum creation in the high school. The way of investigation was through the questionnaire sheet by mailing. The subjects were teachers who were specialists of physical education in the 603 public ordinary high schools in the kanto area, 7 provinces. The period of the investigation was from Sep 12th to 30th in 2001.

The results and inference were as follows.

- 1) Assignment dance lesson in the high school ratio was 65.0%.
- 2) 62.2% of Girls' class, were assigned compulsory dance lesson.
- 3) The Dance of Modern Rhythm had carried out various items. Therefore, the individual difference of the contents of dance lesson had spread.
- 4) Although teachers gave high value of teaching effect for the Creative Dance Lesson, there is not so high appreciation by student, and they point out difficulty of teaching.
- 5) Teachers showed the interest in the Dance of Modern Rhythm, because these dance lesson have good physical training volume and have good motivation by rhythmical practice. But, the most of teachers indicated anxiety about the way of lesson, due to lack of practical experience to the dance and lack of teaching experience.
- 6) As a result of introducing a selection system, the tendency was seen that priority came to be given to a student's interest and ease of teaching in item adoption, and the educational target of dance lesson became ambiguous.

From the above, to a development of a dance lesson, we thought that creation of the dance curriculum which constituted the dance item which everyone of a teacher could teach with confidence, and the student could learn with interest, and fitted the educational target and the contents of dance study is desirable.

I 緒 言

平成10年度の新学習指導要領(以下,新指導要領とする)の改訂により,保健体育では「心と体を一体としてとらえる」ことを新たに掲げ,「生涯を通じて継続的に運動ができる資質・態度の育

* 運動教育学研究室(非常勤)

Movement Education

** 運動教育学研究室

Movement Education

*** 体育科教育学研究室

Sport Pedagogy

成」を目標として「運動のとりあげ方の弾力化」「運動の学び方」などを重視して改訂された⁵⁾⁻⁸⁾。具体的には、運動領域および運動種目の選択制の拡大導入、主体的学習活動の推進、「体ほぐしの運動」の導入があげられる¹⁾¹²⁾。ダンス領域では、従来の「創作ダンス」、「フォークダンス」に加えて、新たに「現代的なリズムのダンス」が導入され、これらから運動を選択して履修できるように改訂された⁵⁾⁻⁸⁾。また、前回(平成元年)の改定から、地域や学校の実態に応じて「その他のダンス」についても履修させることができることとなっている⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾。

新指導要領解説によれば、ダンスは、心身を解き放して、リズムやイメージの世界に没入して踊ることが楽しい運動であり、仲間と交流して踊ったり発表し合ったりする楽しさや喜びを味わうことができる運動であり、自己の能力に応じた課題を選び、自ら考え工夫するとともに、誰とでも協力して課題を解決できるようにすることが大切とされている⁵⁾。従来のダンスのねらいに比較して、踊る楽しさを強調したものとなっている。一方、アメリカの舞踊教育学者であるM. ドゥブラー²⁾は、ダンスは律動的な身体運動による創造的・表現的・伝達の・社会的な人間行動であり、舞踊教育の目的は身体的・情緒的・知的・精神的エネルギーの総括的表現によるパーソナリティーの開発にあるとし、特に、創造的運動経験を重視している。教育におけるダンスの目標は、表現運動を通して、巧みに自分の体をコントロールする運動能力を養うとともに、自己の精神的・知的内面に気づき、外界に対する感性を高めながら、他者への理解と関わりを深めることにあると考える。なかでも、創作ダンスの主体的問題解決学習の過程において培われる創造性や協調性、実行力、作品発表における達成感、身体的・知的・精神的発達を促し、豊かな人間形成を導くものであろう。ダンスは、競技を主体としてその運動技能を高めることを目標とする他の運動領域とは大きく異なる特徴を持ち、体育の中でも「心と体の一体化」「主体的学習」などの新指導要領のねらいを実現するのに適した運動領域ではないかと考える。ま

た、ダンスは社会体育の場面においても、広い施設や高価な用具を必要とせず、一人でも手軽にできる運動であること、多様な運動様式があるので個人の体力や嗜好に合わせ、老若男女に広く対応できる運動領域であることなどから、生涯スポーツにつながる可能性も大きいと考える。

種目選択制の拡大と新種目の導入により、ダンスはカリキュラムが多様化して生徒の個性に対応しやすくなった。しかし、その反面、学習内容や指導方法に偏りが生じ、基礎・基本の習得に支障をきたすことが危惧されている。特に新しいダンス種目については教材研究や指導法研究、指導力養成が十分行われぬままの施行であった。また、ダンスの男女共修が施行されてから10年以上経過しているが、その後の実施状況を調査した研究は見当たらない。女子学生を対象とした筆者らの先行研究¹⁵⁾によると、平成10年度には女子の高等学校でのダンス経験が65%にまで減少しているという調査結果が出ている。このように、ダンス授業にはいくつかの実施上の問題点がある。これらの実態や問題点を明確にして、望ましいダンス・カリキュラムを作成することが必要なのではないと思われる。

そこで本研究は、ダンス授業実施の現状と問題点を明らかにし、望ましいダンス・カリキュラム(年間計画・単元計画)作成への手がかりを導き出すことを目的とする。

II 研究方法

1. 調査方法

調査方法は、筆者らが作成した調査票による質問紙調査法であり、郵送法により実施し、回収した。主な調査項目は平成12年度の体育授業に関する種目選択制の実施状況、ダンス授業の実施状況、ダンス・カリキュラムに関する意識調査、(詳細は表1参照)からなり、選択肢式および記述式により回答を得た。その集計結果を比較分析・考察した。

2. 調査対象

調査は、選択制の拡大実施とダンス授業の実施状況との関係を見るため、選択性の適用範囲が広

表1 調査項目

回答対象	質 問 項 目
全 校	1. 種目選択制実施の有無 2. 種目選択制に対する評価およびその理由 3. 平成12年度のダンス授業実施の有無
ダンス実施校	4. ダンス授業実施の理由 5. ダンスカリキュラムの計画の立て方 6. ダンス授業の学年別実施状況 学年別実施の有無 必修・選択の別 男女のクラス編成 年間配当時間 学習内容(ダンスの種類) ダンス種目選択制実施の有無 7. ダンス種目別の授業形態および評価方法 8. ダンス・カリキュラムに関する意識調査 必修・選択に対する評価および理由 男女共修・別学に対する評価および理由 理想配当時間 現代的なリズムのダンス導入に対する評価 ダンス種目選択制に対する評価および理由 ダンスの種類別採択意志および理由 現代的なリズムのダンスへの不安や要望
ダンス非実施校	9. ダンス授業非実施の理由 10. 今後、ダンス授業を実施する意向の有無
全 校	11. ダンス授業に関する悩みや問題点

い高等学校を対象とした。また、実態をできるだけ正確に把握するため、地域を限定した全調査とし、関東7都県の全日制普通科公立高等学校、全603校を調査対象とし、各校の体育教員のうち、ダンスを実施している学校についてはダンス担当教員のいずれか1名、ダンスを実施していない学校については体育主任教員1名に回答を依頼した。回収率は70.6%(426校)、うち有効回収率は69.7%(420校)であった。有効回収数のうち、

男女共学校は88.6%(372校)、男子校は3.8%(16校)、女子校は6.4%(27校)であった。各都県の内訳は表2に示した。調査期間は平成13年9月12日~9月30日であった。

III 結果および考察

1. ダンス授業の実施・非実施の実態と教員の意識

平成12年度のダンス授業の実施状況は実施校65.0%(273校)、非実施校35.0%(147校)であった。実施校の内訳は、共学校251校、女子校22校である。非実施校の内訳は、共学校127校、女子校4校、男子校16校で、男子校の全てがダンスを実施していない。ダンスは平成元年度の指導要領改訂以前は女子の必修種目であったのに比較すると、現在の実施率65%という数字はかなり低いといえよう。一方、男子校がダンスを実施していない理由は、「男子校だから」「今までもダンスを行っていない」「(男子には)他の種目のほうが優先される」などが多く、従前の学習指導要領でダンスが女子種目であった経緯が影響していると考えられる。

表3は共学校および女子校のダンスの実施・非実施の理由の回答率を示したものである。回答は選択複数回答による。ダンス実施校の実施理由は、「今までもダンスをやっていたから」64.4%、「指導要領で取り上げられているから」57.0%などが半数以上を占める。以下は、「ダンスは教育的価値があると思うから」26.3%、「女子の種目として適しているから」25.6%、「ダンスを指導できる教員がいるから」15.2%、「体育の全ての領域にわたって運動を体験させるべきだから」14.8%などであった。

一方、ダンス非実施校(共学校および女子校)の非実施理由は、「今までもダンスをやっていないから」67.5%が多く、過去の実績を踏襲する傾向が強い。平成元年度の改訂で武道との選択制が導入された際に、すでにダンスを実施しなくなっている学校が多いと考えられる。他には、「他の種目が優先されるから」38.2%、「選択する生徒が少ない」19.5%、「選択制になったから」12.2

表2 各都県の有効回収率

都県名	学校数	有効 回答数	有効 回収率	共学校		女子校		男子校		不明	
				n	%	n	%	n	%	n	%
東京都	146	96	64.4	93	96.9	3	3.2	0	0.0	0	0.0
神奈川県	149	106	71.1	105	99.1	1	0.9	0	0.0	0	0.0
埼玉県	98	59	60.2	49	83.1	4	6.8	3	5.1	3	5.1
千葉県	81	60	74.1	56	93.3	3	5.0	0	0.0	1	1.7
茨城県	62	41	66.1	39	95.1	1	2.4	0	0.0	1	2.4
栃木県	32	28	87.5	16	57.1	5	17.9	7	25.0	0	0.0
群馬県	35	30	85.7	14	46.7	10	33.3	6	20.0	0	0.0
計	603	420	69.7	372	88.6	27	6.4	16	3.8	5	1.2

表3 ダンス実施・非実施の理由

ダンス実施理由	n	%	ダンス非実施理由	n	%
今までもダンスをやっていたから	174	64.4	今までもダンスを行っていないから	83	67.5
指導要領で取り上げられているから	154	57.0	他の種目の方が優先されるから	47	38.2
ダンスは教育価値があると思うから	71	26.3	ダンスは指導が難しいから	46	36.6
女子の種目として適しているから	69	25.6	選択する生徒が少ないから	24	19.5
ダンスを指導できる教員がいるから	41	15.2	指導できる教員がないから	22	17.6
全ての領域から種目を行うべきだから	40	14.8	選択制になったから	15	12.2
学校の方針だから	21	7.8	ダンス用の施設が不足しているから	14	11.4
ダンスを選択する生徒が多いから	16	5.9	ダンスは教育価値が低いから	1	0.8
男子にも履修する機会を与えるべきだから	12	4.4	その他	12	9.6
ダンスのための施設があるから	6	2.2			
その他	11	4.1			

n = 270

n = 125

%など、選択制の実施による影響と考えられる理由があげられていた。自由記述からは、「選択制で男女共修の種目設定をする際に、時間数と種目数の制限の中で男子の適性を考慮するとダンスは省かれる」という回答もあった。また、「指導が難しい」36.6%、「指導できる教員がない・不足」17.6%など、指導上の困難さがあげられていた。これらの理由に比べて、「ダンスは教育的価値

が低いから」は0.8%にすぎず、ダンス領域の実施意義そのものを否定する回答は少なかった。したがって、ダンス非実施の理由は、「過去の実績」「選択制の影響」「指導上の困難」が主要要因であると考えられる。

2. ダンス授業の実施体制

(1) 必修・選択による実施状況と教員の意識

表4は、学年別のダンス実施率およびその必修

表4 ダンス授業の必修・選択別実施率

学年	実施数 n	実施率 n/273	必修のみ		選択のみ		必修および選択	
			n	n/273	n	n/273	n	n/273
1年生	180	65.9	136	49.8	38	13.6	7	2.6
2年生	210	76.9	153	56.0	52	19.0	6	2.2
3年生	67	24.5	34	12.5	29	10.6	4	1.5
全学年	273		188	68.9	52	19.0	33	12.1

実施校総数n = 273

と選択の割合を示したものである。各学年のダンス実施率は1年生65.9%、2年生76.9%、3年生24.5%であった。ダンスは1, 2年生での実施率が高い。必修・選択別の実施率は、全学年では、必修のみが68.9%、選択のみが19.0%であった。各学年では、必修のみでの実施率は1年生49.8%、2年生56.0%であり、3年生や選択のみでの実施率はいずれも20%に満たないことから、ダンスは1, 2年生の必修種目としての実施率が高いといえる。

一方、教員の意識調査によると、ダンス授業は「必修がよい」24.3%に対し、「選択制がよい」43.4%、「両方がよい」16.5%となっている。半数近くの教員がダンスは選択制で行うのがよいと感じていることが分かった。選択制を希望する理由としては、「生徒の好き・嫌い・苦手がはっきり分かっている」「興味・関心のない生徒を指導するのは難しい」「意欲のある生徒でやる方が雰囲気もいいし、いい作品が作れる」といった趣旨の回答が多かった。

確かに、生徒の自己責任において選択した方が必修よりも意欲的に授業に望めるといふ選択制の利点はあると思われる。しかし、「興味・関心のない生徒を指導するのは難しい」などの理由から選択制を希望する意見からは、選択制にかまけて困難な指導を回避しようとする教員の姿勢が窺えた。

(2) 男女共修の実施状況と教員の意識

表5は共学校のダンス実施クラスの男女編成を必修・選択と対応させてクロス集計した結果であ

る。実施クラスの男女編成の割合は、全学年で女子クラスが74.3%、男女共修クラスが24.9%であった。男子クラスは0.7%、1年生で1クラス、3年生で2クラス実施されているにすぎない。ダンスの男女共修が導入されて10年以上になるが、男女共修クラスの実施率は女子クラスの3分の1にとどまっている。

これを必修・選択別に見ると、全学年で62.2%が必修の女子クラスである。特に1, 2年生の必修の女子クラスでの実施率が高い。ダンスが必修の女子クラスでの実施率が高い理由は、従前の指導要領で女子の必修種目であった影響と考えられる。一方、男女共修クラスは、全学年で必修7.7%に対し、選択15.0%であった。男女共修クラスは選択での実施率の方が高いといえる。

教員の意識調査では、「男女共修がよい」26.6%、「男女別学がよい」24.0%、「両方併用」11.2%、「どちらでもよい」23.1%、「わからない」15.4%と意見がばらばらであった。男女共修の是非についての自由記述からは、「ダンスは他の種目に比べて男女の体力差があまり影響しない」「男女を区別する必要がない」「互いのよさを認めあえる」「表現の幅が広がる」ので男女共修が望ましいとする意見と、「男女が意識しすぎて恥かしかる」「感性の違いがあって指導しにくい」「経験の違いがある」ので男女別学の方がやりやすいという意見に分かれた。

ダンスに対する体育教員と学生のイメージを比較した武井らの先行研究¹⁶⁾によると、教員はダンスを固定的な社会通念から「女性的な」とらえ

表5 共学校における必修・選択別および男女編成別実施率

		共修クラス		女子クラス		男子クラス		計	
		n	%	n	%	n	%	n	%
1 年 生	必修のみ	13	7.7	112	66.7	1	0.6	126	75.0
	選択のみ	24	14.3	12	7.2	0	0.0	36	21.4
	必修および選択	4	2.4	2	1.2	0	0.0	6	3.6
	合計	41	24.4	126	75.0	1	0.6	168	100.0
2 年 生	必修のみ	11	5.8	125	65.8	0	0.0	136	71.6
	選択のみ	28	14.7	21	11.1	0	0.0	49	25.8
	必修および選択	3	1.6	2	1.1	0	0.0	5	2.6
	合計	42	22.1	148	77.9	0	0.0	190	100.0
3 年 生	必修のみ	8	14.5	20	36.4	0	0.0	28	50.9
	選択のみ	10	18.2	12	21.8	2	3.6	24	43.6
	必修および選択	2	3.6	1	1.8	0	0.0	3	5.5
	合計	20	36.4	33	60.0	2	3.6	55	100.0
全 学 年	必修のみ	32	7.7	257	62.2	1	0.2	290	70.2
	選択のみ	62	15.0	45	10.9	2	0.5	109	26.4
	必修および選択	9	2.2	5	1.2	0	0.0	14	3.4
	合計	103	24.9	307	74.3	3	0.7	413	100.0

る傾向があるという結果が出ている。男女共修の実施率の低さには、教員のダンスに対する性差意識と男女共修に対する戸惑いが影響していると考えられる。男女共修は男子にダンスを体験する機会を与えるだけでなく、女子の表現の幅を広げ、男女の表現特性の違いを理解し合う上でも意義が大きいので、今後の実施率の増加が望まれる。

3. ダンス種目の実施状況

(1) ダンス種目の分類

ダンスには多様な種類があり、それぞれ異なった特性と目的をもっている⁴⁾。そのうち、学校で取り扱うダンスを、新指導要領⁶⁾では「創作ダンス」「フォークダンス」「現代的なリズムのダンス」という分類から内容として取り上げている。また、この3つに含まれないダンスを「その他のダンス」とし、地域や学校の実態に合わせた実施を認めている。指導要領解説⁵⁾によると、創作ダン

スの特性は、表したいイメージやテーマを全身の動きで自由に表現することにあるとしている。フォークダンスには日本の民踊と外国のフォークダンスが含まれており、踊りを通して自国の文化や異文化の理解を深めることを目標としている。現代的なリズムのダンスの特性は、全身でリズムをとらえて自由に即興的に踊ることにあるとし、ロックやヒップホップなどのリズムに乗って、自由に工夫して踊ったり、作品にまとめたりすることとしている。

しかし、「現代的なリズムのダンス」という分類は非常に曖昧で、解釈によっては、その具体的なダンス種目が異なってくる傾向がある。また、「その他のダンス」についても具体的には「社交ダンス」が例示されているだけなので、他にどんなダンス種目が含まれるのか分かりにくい。

本研究では、「現代的なリズムのダンス」は、

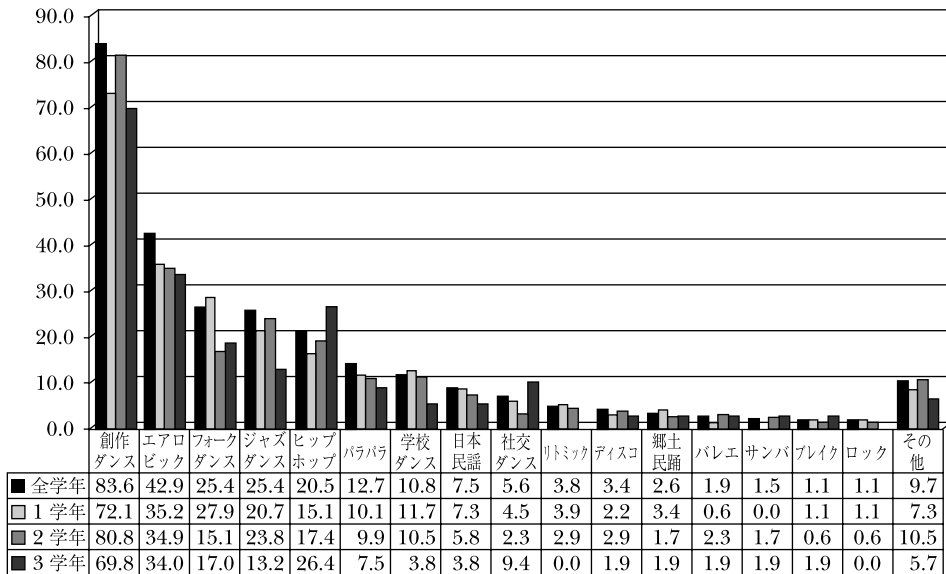


図1 ダンスの種目別実施率

現代的でリズムカルな音楽に合わせて自由に踊るダンスという解釈から、実施されたダンス種目のうち、ヒップホップ、ジャズダンス、ディスコダンス、ブレイクダンス、ロック、サンバ、パラパラを含めることとした。「その他のダンス」には、社交ダンス、エアロビックダンス、リトミック、学校ダンス、クラシックバレエなどを含めることとして分類した。

(2) ダンスの種目別実施状況

ダンス実施校における各ダンス種目の実施率は、「創作ダンス」83.6%、「その他のダンス」53.4%、現代的なリズムのダンス」46.6%、「フォークダンス」30.2%の順であった。図1はダンス実施校における各ダンス種目の実施率の詳細を示したものである。これによるとダンス実施校の全学年で取り上げているダンス種目は、創作ダンスが83.6%でもっとも多い。2番目に多いのはエアロビックダンスの42.9%であった。以下、外国のフォークダンス25.4%、ジャズダンス25.4%、ヒップホップ20.5%、パラパラ12.7%の順に多かった。また、1種目のみ実施している場合の実施種目をみても、創作ダンス71.0%、エアロビック

ダンス9.3%、フォークダンス5.6%の順に多かった。ダンス実施校全体で実施されたダンス種目は17種目以上であり、1校あたりの平均実施種目数は2.59種目、最高6種目、最低1種目、標準偏差1.29であった。

これらから、ダンスの内容選択制が導入された現在でも、ダンスの学習内容の軸は創作ダンスであることがわかる。また、従前はダンス領域の内容は「創作ダンス」と「フォークダンス」の2つのみであったのに比べ、平成元年の改訂で「その他のダンス」の取り扱いが認められて以降、エアロビックダンスが急速に普及して、フォークダンスを凌ぐ実施率になっていることが注目される。また、「現代的なリズムのダンス」は平成10年の改訂で導入されてから3年しか経っていないにもかかわらず、全学年で125校46.6%の実施が確認された。選択制が拡大された結果、ダンスの学習内容における学校格差が広がり、同時にダンスの学習経験に個人差が出てきていることがうかがえる。

なお、本調査では現代的なリズムのダンスとしてパラパラが12.7%も実施されていた。パラパラ

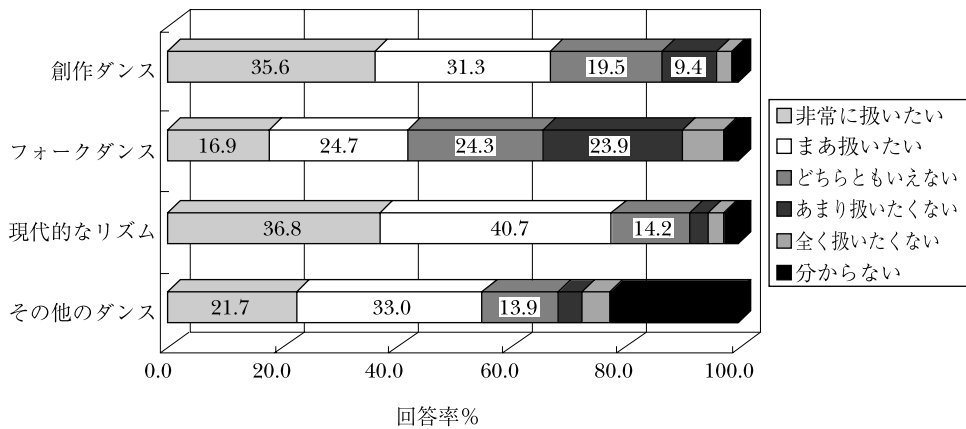


図2 ダンスの種目別採択意向

は最近の若者に流行している上肢の当て振りを中心としたダンスで、ダンスの教育目的に照らして考えると、教材として適していないと思われる。しかし、調査校の中には、パラパラ1種目のみを実施している学校も数校あり、ダンスの学習内容の採択に混乱がみられた。このような混乱の原因は指導要領の表記が抽象的で曖昧な結果と考えられる。

(3) 教員のダンス種目別教材採択意向とその理由

図2は、教員のダンスの各種目について教材採択意向の割合を示したものである。肯定的意見の「非常に扱いたい」「まあ扱いたい」を合計すると、「現代的なリズムのダンス」が77.5%で最も多く、次いで「創作ダンス」66.9%、「その他のダンス」54.7%、「フォークダンス」41.6%であった。これを前述した「各ダンス分野の実施率」と比較すると、「創作ダンス」は実施率83.6%よりも採択意向率66.9%のほうがやや下回っているといえる。反対に、「現代的なリズムのダンス」は実施率46.6%に対し、採択意向率は77.5%であり、現時点では実施には至っていないものの、今後採択される可能性が高いと考えられる。

表6はダンスの種目別採択意向の理由を回答率の高い順に示したものである。回答は選択複数回答である。創作ダンスでは採択校の肯定的理由

(以下、肯定とする)として「生徒の個性や力量に合わせて学習できる」46.0%、「教育的価値が高い」41.7%、「運動文化としての価値が高い」23.7%、「表現方法が生徒にふさわしい」23.7%が上位であり、非採択校の否定的理由(以下、否定とする)としては「指導が難しい」35.7%、「生徒が好まない」33.3%、「運動量が少ない」21.4%が上位にあげられていた。フォークダンスでは肯定は「簡単で誰でもすぐにはできる」62.3%、「踊る楽しさを享受させやすい」51.9%、「指導しやすい」26.0%が、否定は「生徒が好まない」32.5%が上位にあげられていた。現代的なリズムのダンスでは肯定は「踊る楽しさを体験させやすい」72.1%、「生徒に人気がある」48.4%、「運動量が確保できる」29.5%、「時代の流れに合わせたい」27.0%、「ウォーミングアップに適している」23.1%が、否定は「指導の経験がない」22.3%が上位であった。その他のダンスでは肯定は「運動量が確保できる」37.5%、「踊る楽しさを体験させやすい」32.1%、「ウォーミングアップに適している」28.6%が、否定は「指導の経験がない」20.6%、「指導が難しい」20.6%が上位であった。

これらの結果から、教員はダンスの種目採択に際し、創作ダンスには個性を生かした表現による主教材としての教育効果を、他の内容には踊る楽

表6 ダンスの種目別採択意向の理由(採択・非採択別)

順位	創作ダンス			フォークダンス			現代的なリズムのダンス			その他のダンス			
	理由	採択%	非%	理由	採択%	非%	理由	採択%	非%	理由	採択%	非%	
肯定的理由	1	個性・力量に合う	46.0	23.8	踊る楽しさの体験	62.3	22.3	踊る楽しさの体験	72.1	52.3	運動量の確保	37.5	20.6
	2	教育価値が高い	41.7	23.8	簡単	51.9	30.6	生徒に人気がある	48.4	35.4	踊る楽しさの体験	32.1	26.5
	3	表現方法が適合	23.7	7.1	指導しやすい	26.0	8.9	運動量の確保	29.5	31.5	W-upに適合	28.6	23.5
	4	運動文化の価値	23.7	14.3	運動文化の価値	15.6	14.0	時代の流れに合致	27.0	21.5	指導しやすい	19.6	8.8
	5	踊る楽しさの体験	19.0	4.8	運動量の確保	10.4	7.0	W-upに適合	22.1	23.1	運動文化の価値	17.9	11.8
	6	指導しやすい	2.4	0	生徒に人気がある	10.4	0.6	個性・力量に合う	16.4	7.7	簡単	14.3	5.9
	7	生徒に人気がある	1.9	0	W-upに適合	7.8	6.4	表現方法が適合	11.5	10.0	生徒に人気がある	14.3	2.9
	8	簡単	0.9	4.8	教育価値が高い	5.2	1.3	簡単	6.6	3.1	個性・力量に合う	8.9	2.9
	9	運動量の確保	0.5	0	個性・力量に合う	5.2	2.5	指導しやすい	5.7	3.1	時代の流れに合致	7.1	2.9
	10	W-upに適合	0.0	0	表現方法が適合	2.6	1.3	教育価値が高い	1.6	1.5	教育価値が高い	5.4	5.9
	11							運動文化の価値	0.0	2.3	表現方法が適合	3.6	5.9
否定的理由	1	指導が難しい	16.6	35.7	生徒が好まない	10.4	32.5	指導経験がない	4.9	22.3	指導が難しい	5.4	20.6
	2	生徒が好まない	18.5	33.3	配当時間不足	9.1	17.2	指導が難しい	8.2	15.4	指導経験がない	5.4	20.6
	3	運動量が少ない	6.6	21.4	教材として不要	6.5	14.6	配当時間不足	0.0	6.2	教材として不要	1.8	17.6
	4	配当時間不足	3.3	9.5	運動量が少ない	2.6	10.8	教材として不要	1.6	5.4	配当時間不足	7.1	11.8
	5	表現方法不適合	2.4	7.1	指導経験がない	1.3	7.0	運動技術が難しい	3.3	3.8	生徒が好まない	5.4	5.9
	6	教材として不要	1.4	4.8	時代の流れに合致	1.3	6.4	生徒が好まない	0.0	2.3	表現方法不適合	0.0	0.0
	7	運動技術が難しい	2.8	2.4	表現方法不適合	0.0	4.5	表現方法不適合	0.0	0.8	運動量が少ない	0.0	0.0
	8	指導経験がない	1.9	2.4	指導が難しい	0.0	4.5	運動量が少ない	0.8	0.8	運動技術が難しい	3.6	0.0
	9	時代の流れに合致	3.3	0	運動技術が難しい	0.0	1.3						
	その他	1.9	0	その他	1.3	3.2	その他	0.8	2.3	その他	5.4	5.9	

n = 211 n = 42

n = 77 n = 157

n = 122 n = 130

n = 56 n = 34

しや運動量の確保を期待し、ウォーミングアップなどの導入教材的にとらえているといえる。この創作ダンス以外の内容についての採択理由からは、ダンスの教育目標を十分に理解したうえでの回答とは考えにくい。たとえば、フォークダンスのねらいは各国・各民族の運動表現を通じてその文化への理解を深めることにあるが、採択理由の「運動文化としての価値が高い」は15.6%の回答率にすぎず、「踊る楽しさ」や「簡単さ」「指導のしやすさ」が非常に多いことから、教育目標を重

視せず安易な方向へ流されている様子が窺える。

また、「生徒の興味・関心の有無」は意欲的な学習態度、主体的学習活動を支える重要な要因であり、選択制においては生徒の種目選択率に影響するので、教員側にとっても種目採択基準の一つの柱となっていると考えられる。つまり、現代的なリズムのダンスが「生徒に人気がある」こと、創作ダンスやフォークダンスを「生徒が好まない」と感じていることが教材採択意向に影響を及ぼす傾向がみられる。そして、創作ダンスでは「指導

表7 現代的なリズムのダンスに対する不安や要望

不安や要望	n	%
実技経験が不足している	154	57.7
映像資料が欲しい	102	38.2
実技研修を受けたい	94	35.2
評価が難しい	62	23.2
指導方法がわからない	46	17.2
指導法研修を受けたい	43	16.1
学習目標が立てにくい	36	13.5
指導解説書が欲しい	33	12.4
内容の扱い方がわからない	30	11.2
他の種目との時間配分に悩む	15	5.6
その他	8	3.0

の難しさ」が、現代的なリズムのダンスやその他のダンスでは「指導経験がない」ことが、授業の実施を阻む教員の不安要因と考えられる。表7「現代的なリズムのダンスに対する不安や要望」でも、「実技経験の不足」57.7%は第1位にあげられていた。

このような実態を改善するためには、ダンスの教育目標・学習内容を再検討し、望ましいダンス・カリキュラムを作成することと、教員の誰もが自信を持って指導できるような指導方法・指導内容の確立が必要と思われる。

IV 結 論

本研究における実態調査の結果、以下のようなダンス授業の実態が明らかになった。

公立高等学校におけるダンス授業の実施率は、従前の指導要領で女子の必修科目であったのに比べ、65.0%に低下している。ダンスは1,2年生の女子の必修としての実施率が高く、選択科目や男女共修クラスとしての実施率はまだ少ない。内容選択制および現代的なリズムのダンス導入により、ダンスの実施種目は17種目以上に多様化しており、ダンスの学習内容における学校格差が広がり、同時にダンスの学習経験に個人差が出てきている。

こうした実施状況の主な原因としては、教員が指導力・指導経験不足のためにダンスの採択を回避する場合が少なくないこと、男女共修の選択制において、ダンスは他の運動領域よりも男子の運動種目としての優先順位が低いと考えられていることがあげられる。また、実施種目の採択に際し、生徒の好みや指導のしやすさが優先される傾向があり、学校によっては、ダンスの教育目標から外れたカリキュラムがみられた。

各種目については、創作ダンスは83.6%の高い実施率であり、教員からダンス領域の主軸としてその教育的価値や効果は認められながらも、生徒に好まれないこと、指導法が難しいことなどが原因で敬遠されがちであった。フォークダンスは簡単ですぐに楽しむことができ、指導もしやすいが、生徒に人気がないと考えられており、実施率も30.2%とあまり高くない。現代的なリズムのダンスは、運動量が確保できることや踊る楽しさを体験させやすいこと、生徒の興味・関心が高いことから教員に77.5%もの支持を得ており、実施率も46.6%となっているが、その一方で、教員の実技経験や指導経験の不足が指導に対する不安をもたらしている。その他のダンスの実施率は53.4%で、その中でもエアロビックダンスの実施率が42.9%と高く、運動量の多さからウォーミングアップとして教員の支持を得ている、などの結果が得られた。

これらから、次のように問題点がまとめられる。ダンスにおける選択制の拡大導入は、生徒の個性や主体性を尊重できる反面、生徒の好みや楽しさを優先させた種目の選択に甘んじ、ダンスの教育目標が曖昧になり、教員の指導力不足による授業実施の回避を助長させる傾向にあると考えられる。また、「現代的なリズムのダンス」の新たな導入によって、ダンス種目の分類上の解釈に混乱が見られ、教材研究や指導法研修の立ち遅れが再確認された。

以上の問題点から、ダンス・カリキュラム作成上の重要点は、ダンス種目の分類と学習目標の明確化にあると思われる。ダンスの実施率を高め、生徒のダンス履修の機会を充実させるためには、

教員の誰もが自信をもって指導でき、生徒が興味を持って取り組みやすいダンス種目を取り上げながらも、教育目標に適したダンス種目および学習内容を構成したカリキュラムの作成が望ましいと考えられる。

今後の課題は、ダンス授業の実態について実地踏査によりさらに詳しい調査を行うとともに、生徒を対象とした意識調査を行い、教員・生徒の両方向からの視点で考察を行うことである。それらの結果を踏まえて、ダンスが多くの教員・生徒に理解され、支持されるよう取り組みやすいダンス・カリキュラムを作成し、具体的な提案を進める必要がある。

V 要 約

本研究は、高等学校のダンス授業の実施状況と問題点を実態調査にもとづいて明らかにし、望ましいダンス・カリキュラム作成への手がかりを導き出すことを目的とする。調査方法は、調査票による質問紙調査を郵送法により実施した。調査対象は関東7都県の(全日制普通科)公立高等学校、全603校とし、各校の体育教員1名を回答者とした。調査期間は平成13年9月12日～9月30日であった。

結果および考察は以下の通りであった。

- 1) ダンス授業の実施校は65.0%であった。
- 2) 共学校のダンス授業は必修の女子クラスが62.2%であった。
- 3) 現代的なリズムのダンスの導入により、実施種目は多様化し、学習内容の個人差が広がっていた。
- 4) 教員の意識調査では、創作ダンスは生徒の個性や力量に合わせて学習でき、教育価値が高いが、生徒に人気がなく、指導が難しいという問題点があげられていた。
- 5) 現代的なリズムのダンスは踊る楽しさを体験させやすいことや生徒の興味・関心が高いこと、運動量が確保できることから、教員に大変好評であった。しかし、実技経験や指導経験の不足から、多くの教員が指導に対する不安をもっていた。

6) 選択制の拡大導入により、生徒の好みや指導のしやすさを優先させた種目選択が行われ、ダンスの教育目標が曖昧になり、教員の指導力不足による授業実施の回避を助長させる傾向がみられた。

以上から、ダンスの実施率を高め、生徒のダンス履修の機会を充実させるためには、教員の誰もが自信をもって指導でき、生徒が興味を持って取り組みやすいダンス種目を取り上げながらも、教育目標に適したダンス種目および学習内容を構成したカリキュラムの作成が望ましいと考えられる。

参 考 文 献

- 1) 池田延行・戸田芳雄：新しい教育課程と学習活動の実際 体育、8-30、東洋館出版社、(1999)
- 2) M. ドゥブラー：舞踊学原論 創造的芸術経験、松本千代栄訳、58-68、大修館書店、(1974)
- 3) 松本富子：新しい体育分野の目標と内容 ダンス、本村清人・戸田芳雄編著：改訂中学校学習指導要領の展開 保健体育科編、183-189、明治図書出版、(1999)
- 4) 三浦弓枝：ダンスの学習指導、31-32、215、光文書院、(1994)
- 5) 文部科学省：高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編、57-63、東山書房、(1999)
- 6) 文部省：高等学校学習指導要領、1-14、96-103、大蔵省印刷局、東京(1999)
- 7) 文部省：中学校学習指導要領、1-6、71-79、大蔵省印刷局、東京(1998)
- 8) 文部省：中学校学習指導要領解説 保健体育編、62-70、東山書房、(1999)
- 9) 文部省：中学校学習指導要領、76-81、大蔵省印刷局、東京(1989)
- 10) 文部省：高等学校学習指導要領、88-93、大蔵省印刷局、東京、(1989)
- 11) 文部省：高等学校学習指導要領解説 保健体育科編 体育編、93-94、東山書房、(1989)
- 12) 本村清人：保健体育科の改訂のねらいと要点、本村清人、戸田芳雄編著：改訂中学校学習指導要領の展開 保健体育科編、11-28、明治図書出版、(1999)
- 13) 園山和夫：選択制授業、杉山重利・園山和夫編

- 著：新・体育科教育，129-147，ぎょうせい，(1993)
- 14) 中村恭子・武井正子・浦井孝夫：創作ダンスの作品鑑賞における自己評価と相互評価に関する一考察
グループ創作作品の鑑賞評価を手がかりとして，
順天堂大学スポーツ健康科学研究，5，8-15，
(2001)
- 15) 武井正子・中村恭子：高等学校での運動経験の差によるダンスイメージの比較，順天堂大学スポーツ健康科学研究，4，32-41，(2000)
- 16) 武井正子・石井千代江；高等学校の男女共修のダンス学習に関する研究 体育科教員のダンスイメージを通して，順天堂大学保健体育紀要，37，9-17，(1995)

(平成13年12月10日 受付)
(平成14年3月19日 受理)